闇社会に囚われし
美女の末路
前編
作者
大黒達也
ミキサー 0374pm

『闇社会に囚われし美女の末路　前編』

作者　大黒達也

一．あらすじ

ある日、ふとしたきっかけで知り合った女を、暴力団から助け出すべく立ち上がったサラリーマンの戦い。性交奴隷に落とされ、薬をうたれ、獣のように犯され最後には食肉として調理され貪り食われる若くて美しい女。官能的なレイプシーンや銃撃シーンが満載。

二．登場人物

大黒（おおぐろ）　達也（たつや）
サラリーマン、家族とは別居中

柴（しば）　紀子（のりこ）
旅行者、謎の女

原（はら）　美樹（みき）
柴　紀子の姉、フリーライター

岩崎（いわさき）　順子（じゅんこ）
スナック順子のママ

権藤（ごんどう）　龍一（りゅういち）

人身売買組織を運営する暴力団の組長

村瀬（むらせ）　昭雄（あきお）

権藤組の若頭、冷酷非情な性格の持ち主

ルスコイ

謎のロシア人、大黒の協力者

イリーナ

バー‘ロシアンルーレット’の女主人

『本編』

プロローグ

そこは広さが二十畳ほどもある寝室で、中央には巨大なダブルベッドが鎮座していた。

ベッドの上では、二十代半ばに見える全裸の女が、全身に刺青をした筋骨逞しい数人の男達に裸身を手や口で嬲られていた。

女は高級モデルも及ばぬ程の美貌とスタイルの持ち主であった。

女は、仰向けの姿勢で、若い男の顔に豊かな尻を載せており、アヌスを舐られていた。

また、股間にはひとりの中年男が張り付いて、激しい勢いで膣を舐っていた。

両乳房は二人の男に音を立てて吸われていた。

口には別の男が、真珠入りの男根を突き入れられ、喉を犯されていた。

女は既に何度も逝かされていた。憔悴のためか意識が朦朧としているようだった。

男達による陵辱は、その後数時間も続いた。

途中で女が意識を失っても開放されることはなく、

人形のような白い肉体に何度も欲望の液体を注ぎ込まれた。

それからさらに数時間が経過した。女は意識を失った状態でバスルームに運び込まれ、待機していた若い女に全身を洗い清められた。

女は途中で意識を戻したが、憔悴のために起き上がることもできなかった。

裸身を清められた後で、窓が無い手術室のような場所に運ばれた。部屋の中央にはひとつの手術台が置かれていた。

部屋には三十代半ばの医師と二十代前半と思われる看護師がいた。二人ともマスクをしているので、表情は読み取れなかった。

女は、もうひとつのベッドに横たえられた。

看護師が小型の注射器を医師に手渡した。

注射器を見た女が、医師の腕を掴み、必死に命乞いを始めた。大粒の涙を流し、家族と思われる者の名前を何度も口にした。医師は女を完全に無

視していた。女の手を乱暴に払いのけ、看護師が腕を押さえている間に、腕に注射針を刺した。

すぐに女の動きが緩慢になり、目を閉じ動かなくなった。

看護師は機械的な動作で、医師に手術用のメスを手渡した。医師は間髪を入れずに、麻酔薬で眠らされた女の胸にメスを突き立てた。

少しして、医師は胸部を切開された女から心臓を抜き取った。

医師は脈動している心臓を保冷容器に入れ、慌しく部屋を出て行った。すぐにヘリコプターのエンジン音が聞こえてきた。

手術室には看護師と女の遺体が残された。すぐに先ほどまで、女を陵辱していた男達がやってきて、女の遺体を黒色のビニール袋に入れて外に運びだした。

建物の外は深い原生林の森が広がっていた。

男達は女の遺体を軽トラックの荷台に載せ発進

させた。

数キロほど離れた小屋に運び込んだ。小屋は組織への裏切り者や内臓を抜かれた被害者の死体を処分する場所だった。

小屋の中央に骨まで粉砕する強力な特注性のミキサーが置かれていた。

男達は、小屋の中で女の遺体を持ち上げ、盛り上がった白い尻から巨大なミキサーに押し込み、電源を入れた。

機械音とともに女の遺体がミキサーの中に吸い込まれていく。豊かな尻肉があっという間にミン

チ肉になった。数分で生前は多くの男達を魅了したであろう極上の肉体すべてが細切れにされ、ミンチ肉になった。

ミンチ肉は、ミキサーの隣に置かれた機械装置に入れられ、浸透圧で粉砕した骨と肉を分離された。

男達は正真正銘狂っていた。証拠隠滅のために、女の骨を取り除いたミンチ肉をハンバーグにした。

その夜は、人肉ハンバーグで宴会を行った。宴会場には、女の等身大に拡大した全裸写真が壁に貼られていた。男達は女の美しい裸身を見ながらハンバーグに舌鼓を鳴らした。

ちなみに男達が食するのは、美女の肉のみで男のミンチ肉は、近くにある豚舎で豚の餌にされた。

女の肉は、羊と豚肉を混ぜたような味で舌に絡みつくような濃厚で芳醇な味わいだった。

すべての女肉が喰らいつくされた。

第一章　幻の女

大黒達也は事務机に座り、報告書の作成を行っていた。ちょうど最後の頁を書き上げていたところであった。大黒は札幌にある情報処理関連会社に勤務する会社員である。来週に提出予定のシステム調査報告書の作成を行っているところだった。大黒達也、年齢三十七歳、学生時代の四年間拳法で鍛えただけあって、長身で引き締まった容貌をしていた。オフィスには先ほどから大黒ひとりだけだった。午後九時を少し回ったところか。この時間にはめずらしく他の社員は、皆退社していた。大黒は仕事を切り上げることにした。帰り支度を終え、オフィスの出入り口を施錠してから、エレベータに乗った。

オフィスはビルの七階にあった。エレベータを降り、裏側にある通用口から外に出た。そこは札幌の中心部のオフィス街であった。ビルを出てすぐに、一人の若い女が、近づいてきた。たぶん旅行者が道を聞きに来たのだろと、大黒はとっさに考えた。

「あの……。この辺にトイレありませんか？」

大黒は意外な質問に多少混乱し、まわりを見渡しながら、記憶をたどった。

「トイレですか？この辺りはオフィス街だからな……」

大黒は、自分の会社が入っているビルのトイレに案内することに決めた。

「こっちです」

先程大黒が出た通用口は外から入るとき暗証番号を入力する必要があり、大黒はそれを覚えていなかった。通用口以外にビルに入るには、地下にあるインド料理店への入口を利用するしかなかった。その女を案内し、インド料理店に続く階段を降りていった。女は相当酔っているらしく、階段の途中で一、二度よろけた。大黒はよっぽど肩をかそうかと考えたが、初対面の若い女性の体に触れるのは気が引けた。地下に降り、店の入り口の前を通り過ぎ、さらにビルの奥へと向かった。トイレはその店の中にあったので、エレベータを使い一階のトイレに案内することにした。女は初対

面の大黒と二人きりになることに何も不安を感じていないようだった。エレベータにのり、一階で降りた。

「トイレはこの奥だよ」

一階は消灯されており、非常灯の明かりだけが微かにビル内を照らし出していた。女は暗がりに多少不安を感じたようだ。大黒は仕方なく、

「ここが男性用、こっちが女性用だよ」

と多少大げさな身振りで説明した。女は女性用トイレの前まで来ると、目眩でもしたのか、そこに座り込んでしまった。大黒は助け起こそうと近づいた。

「大丈夫。ここがトイレね。一、二の三」

女は勢いを付けるようにして立ち上がりトイレに入っていった。中から水を流す音が響いてきた。大黒は内心では女を置いて帰ろうかと考えていた。しかし、ビルの通用口を出るためには、扉のロックを外す必要があり、女が相当酔っていたので待つことにした。十分ほどで女は出てきた。

「ホテルはどこなの？」

大黒は、最初からその女を旅行者と決めつけていた。

「Gホテル」

「ホテルまで送るよ」

ふたりは、ビルを出てGホテルがある通りへと向かった。Gホテルは大黒の会社があるビルから目と鼻の先にあった。

「着いたよ」

「ねえ、軽く飲みませんか？」

女は大黒の肩にすり寄ってきた。

「……。いいけど。軽く一杯ね。Gホテルの一階に気の利いた店があるよ」

女はいつの間にか大黒と腕を組んでいた。初対面の男に対してとても自然な感じだった。

「あそこは嫌。他のところがいいわ」

「少し歩いたら、ショットバーがある。ススキノの近くなんだ」

「そこがいいわ」

女は二十代なかごろといったところか。先ほどまでは、多少緊張していたため感じなかったが、も

の凄い美人だった。髪はセミロングで細面の顔に切れ長の二重の瞳、鼻筋はすっきりととおっていた。唇は薄くモデルのような顔立ちをしていた。身長は一六五センチといったところだろう。服装は旅行者らしく軽装で、ジーンズに柄模様のシャツとブレザーを着ており、小さめの黒いバックを手にしていた。大黒が目指していたのは、南三条西四丁目にあるジガーバーという店だった。大通り公園を越える交差点で青信号が点滅していた。彼女は大黒の手を引いて、走り出した。

「奥さんいるんですか？」

「ああ」

「そう残念だな。私も旦那がいるの。二歳になる女の子もいるわ。今、義母に預けているの」

彼女は多少息を切らしているようだ。アルコールのせいか、あるいは、普段余り歩くことはないのだろう。

「札幌には誰ときたの？」

「姉と二人旅。旦那は今ヨーロッパに出張中。外車のディーラなの。旦那にはたまには遊ばせてと

言っているわ。ねえ、そうでしょう？」

彼女の声はどこか女優の鈴木京香に似ており、多少鼻にかかったハスキーな声をしていた。

「そうだな」

彼女はしっかりと、大黒の腕をかき抱いていた。偶然だろうが、手の甲が、彼女の下腹部に当たるので、自然と股間が熱くなった。大黒はさっきから周りの視線が気になっていた。時間は九時半頃であり、通りは帰宅途中の会社員や歓楽街へ向かう観光客で溢れていた。羨望の眼差しであろう。めったにいない美女とサラリーマンのカップルでは今流行の不倫を絵に描いたようだ。

「疲れた？もう少しだから」

「大丈夫。貴方の手って暖かいのね」

彼女が手を握る力を少し強めたように感じた。彼女は都会的なセンスと雰囲気をもっていた。旅先のせいだろうか人妻だというが、初対面の男に対してこんなに自然に振る舞う女は初めてだった。人妻と言えば、隣近所にいる奥さん連中を思い出す大黒だった。普段から無愛想でどちらかと言え

ば寡黙な男であり、人妻と仲良く腕組みをして歩くことなど考えられないことであった。

ジガーバーはメインストリートから少しはずれた小路に面していた。チンピラ紛いの高校生がたむろしていたが、大黒の上背と角刈りの髪型のせいか、誰も絡んでこようとはしなかった。

「怖い。怖い。私って恐がりなの」

大黒の腕を握る手に力が入っていた。

「何が怖いの？」

大黒は学生時代に拳法を経験しており、多少のことでは動じなかった。

「ついたよ。ここだ」

店内では片隅のボックス席に案内された。

「タバコ吸っていい？ブスな姉はタバコが嫌いなの。姉ったらね、さっき一軒目で飲んだ時、男の人に声かけられて、ちょっと話をしたんだけど。それが気にくわないらしいの。見知らぬ男と気軽に話すなってね」

大黒はメニューを見ながら。

「ふーん。厳しい姉さんなんだ。ところで何注文

する？」

彼女はタバコをくわえた。

「私、ワインが好きなの」

「白、赤どちら？」

「白ワインにするわ」

大黒は手振りでボーイを呼んだ。

「ハウスワインの白をグラスで、それとハイボールを頼む」

注文を終えてから、大黒はこれからのことを考えた。一杯飲むだけで済むのだろうか。

「何黙っているの？」

「この店は久しぶりでね。ところでどこから来たの？」

ボーイが白ワインとハイボールを運んで来た。

「埼玉県」

彼女はワインを旨そうに飲みながら答えた。

「田舎なの？周りに水田とかあるとか？」

「水田はないわね」

彼女は大黒が注文したハイボールを手にした。

「ね。これちょっと飲んでみていい？

……。うわ！苦いのね。私のも飲んでみて」

彼女の白ワインは、甘酸っぱい味がした。彼女は先ほどから、大黒の顔をしげしげと見つめていた。

「いい男ね。奥さんが羨ましい」

彼女は同じ台詞を何度も口にした。

「それはこっちの台詞だよ。美人だといわれるだろう？」

彼女は二本目のタバコをくわえた。

「たまにね。……声をかけたのは誰でもよかった訳ではないの。酔っていてもそれくらいは分かるわ」

大黒は、妻とは別居中であることを話さなかった。男を作って家を出たとは話せなかった。彼女はワインを空けていた。

「もう一杯飲むかい？」

「同じのでいいわ」

大黒は白ワインを追加注文した。

「私、水着のモデルもしているの。漫画雑誌に載っているわ。今度見てね」

「ああ、そうするよ。だけど本当に酔っぱらいそうだ」
「好きにしていいのよ。つき合うから」
　彼女は大黒の前髪をさわってきた。
「硬い髪の毛。短いのね」
　大黒は髪を触られるのが悪い気はしなかった。
「ね、次に行かない？」
　二軒目は、ワインバーで軽い食事をとった。彼女がワインの旨い店に行きたいと行ったからだ。彼女との会話はとりとめのない話だが、大黒にとっては新鮮な感じがした。店を出る頃には二人共、相当に酔っていた。千鳥足とまではいかないが。彼女は大黒の横顔を覗くようにして、
「失楽園ってすてきね」
と言った。彼女は大黒に寄りかかるようにして歩いていた。大黒の左腕をしっかり抱えるようにして。二人は当所無く、ススキノの街を彷徨、最後に行き着いたのはラブホテルだった。二人でシャワーを浴び、軽くキスを交わした。　彼女が明かりを嫌うので、フットライトのみ付けることとし

た。彼女はベッドにうつぶせに横たわった。微かな照明の中、彼女の真っ白な裸体が浮かび上がった。大黒の黒々とした岩のような体と対象的であった。着痩せするタイプらしく、胸や尻は驚くほど豊かだった。大黒はそっと彼女の腰の隆起に手を乗せ、静かに太股に向かって滑らせていった。吸い付くような滑らかな柔肌の感触に大黒は我を忘れていた。彼女の太股の間は、すっかりと濡れていた。大黒は彼女の豊満な尻に顔を埋めた。それから五分程、大黒は舌で愛撫を続けた。彼女のあげる声のトーンが少しずつあがっていく。大黒は彼女を仰向けにさせて、乳房から下腹部そして股間へと少しずつ舌を這わせていった。彼女の呼吸が荒くなっていくのが感じられた。シーツを握る手に力が入っていた。突然、背筋を反り返し、大黒の頭を強く締め付けてきた。彼女は一回目のクライマックスを迎えていた。ぐったりとした彼女の乳房に舌をからめると、彼女はうっすらと恥じらいの笑みを浮かべた。

「今度は私にやらせて」

彼女は、大黒をベッドに座らせ、ゆっくりとした動作で大黒の太股から股間にかけて、舌を這わせていった。大黒の黒光りする男根を慈しむように舌で包み込んだ。大黒は小波のようにやってくる快感に身をゆだねていた。彼女の舌が男根を離れ大黒の睾丸に移っていった。大黒は射精感を辛うじてこらえていた。大黒は彼女を抱え起こしベッドに仰向けに寝せて、覆い被さっていった。

傍らから、彼女の安らかな寝息が聞こえていた。深夜を少し回ったところだ。ラブホテルに彼女と入ったのは十一時頃だったのでまだ一時間程しかたっていなかった。大黒は、家に来ている六歳になる娘のことを考えていた。娘は祖父母の家にあずけていたが、一ヶ月に一度は娘と過ごすことにしていた。明日は土曜日で遊園地に行く約束をしていた。大黒は彼女に気づかれないようにそっと身を起こした。

「もう帰るの？」

気づかれたようだ。彼女は大黒の首に抱きついてきた。彼女の甘い息が先程の余韻を残していた。

「帰らないで、朝までここにいて」
大黒は、彼女の名前を聞いていないことに気づいた。自分の名前も教えていなかった。一夜限りの出会いと考えていた。
「まだ、名前聞いていなかったね。俺は大黒達也って言うんだ」
「私は柴紀子。よろしくね」
大黒は彼女の唇に軽いキスをした。
「帰らなくてはならないんだ」
紀子は大黒の顔をじっと見つめた。
「……。そう、残念だけど……。ホテルまで送ってくれる」
二人は身支度をして、人目を避けるようにラブホテルを出た。ススキノはまだ、活動の最中だった。ほろ酔い加減のサラリーマンや客引きで道は混雑していた。紀子はラブホテルを出てから、無言で大黒に寄り添うように歩いていた。
「タクシーを拾うよ」
「もう少し歩きたいの。お願い」
少し歩いたところで、紀子は突然立ち止まった。

「ね。私飲み足りない。少しつき合ってくれない」

大黒は時間を気にしていた。紀子は二人が、立ち止まったすぐ前にある雑居ビルの看板を見ていた。

「三階にスナックがあるようね。クラブ‘リラ’と書いているわ」

彼女は大黒の手を引いて、そのビルに入った。クラブ‘リラ’のドアは少し開いており、中の様子が伺えた。中年の客が、主で若者がいる気配は感じられなかった。

「ちょっと見てくるわ。ここで待っていて」

五分程して紀子は店から出てきた。

「まだ一、二時間は営業しているみたい。帰るそれともつきあってくれる」

大黒は家にひとり残している娘のことが気がかりでならなかった。

「名残惜しいけど帰るよ」

紀子は大黒の顔をじっと見つめ、

「……そう。残念だわ。連絡先の電話番号教えて」

と言った。大黒は人妻と関係を続けることに多少の不安を覚えていた。いやそれより話が旨すぎると疑いの気持ちもあった。

「自宅のかい。自宅はまずいな」

「何か書くものはある」

大黒は自分の名刺とペンを渡した。紀子はクラブ･リラ･の壁に名刺を押しつけるようにして、電話番号と名前を書いた。

「絶対連絡して、お礼がしたいの」

そう言うと紀子はその名刺を返し、大黒の唇に軽くキスをした。大黒は頷きながら、紀子を抱きしめた。

「さようなら」

紀子は名残惜しそうに、大黒の手を握りしめた。大黒はひとり階段を降りていった。

第二章　捜　索

三日後の月曜日、大黒は行きつけのスナック順子でひとりグラスを傾けていた。店はススキノの北側（大通公園方向中央）に位置する雑居ビルの

六階にあった。ママと手伝いの女の子ひとりの小さな店だった。ママの名は岩崎順子、ススキノ界隈では美人ママとして名が知れていた。スレンダーなボディに、黒のワンピースが似合うどこか神秘的な雰囲気を持った女性だった。容姿は他界した女優の夏目雅子に似ていた。ママを目当てに来る客も少なくない。大黒もそのひとりで、店に通いつめて三年になる。常連の客というわけだ。

店内にはカウンターとボックス席を合わせて十六席であった。時間は午後七時を少し回ったばかりで、手伝いの女の子はまだ来ておらず、大黒以外の客もいなかった。大黒はグラスの氷を見つめながら小一時間ほど過ごしていた。

「達也さん。さっきから何でだまっているの？訳有りのようね」

順子はカウンターの片隅で、お通しの準備をしていた。

「今日は暇だね。この分だとあすかちゃんも休みかな」

順子は大黒の前に来て、ジャックダニエルを注

いだ。

「そうね。たまにはいいわ。今日はさしで飲もうか」

大黒は順子のグラスにジャックダニエルを注いでやった。

「お手柔らかにたのむよ。ところでママ、最近軟派されたことある？」

順子は意外な質問に多少戸惑っていた。

「何言ってんのよ。私だって女よ。軟派のひとつやふたつくらい……。ははーあ、新しい女ができたのね」

大黒はジャックダニエルを一気に飲み干した。背広の内ポケットから、裏に電話番号と名前が書かれた名刺を差し出した。

「柴紀子って書いてあるの？これは電話番号？この局番は札幌ではないわね」

大黒は紀子との出会いから別れまで、かいつまんで説明した。順子は最初から最後まで、黙って聞いていた。

「それで紀子さんには電話したの？」

「いや、相手は人妻なんだ。そう簡単にはいかないよ」

紀子は大黒のグラスにジャックダニエルを注ぎ、氷を足した。

「相手の旦那が怖いんだ？」

「ああ、怖いね」

順子は後ろの棚に置いてあった携帯電話を取り出した。

「いいわ、私が電話してあげる。この時間だと旦那が帰っているかもね」

大黒は身を乗り出した。

「彼女が出たら何て言うつもりだ」

「名前を確認するだけよ。事情があって柴紀子さんっていう女性を捜しているんですけど、紀子さんの字はどう書くのでしょうかと聞くわ。相手が答えたら、私が捜している女性とは違うようですねと答えるの。それで確認できるじゃない」

「お任せします」

順子は名刺の裏を見ながら携帯電話のプッシュダイヤルを押した。何回かの呼び出し音の後、留

守録のメッセージが流れた。
「留守のようだわ。後でまた電話してあげる」
順子は、いつの間にか大黒の隣に座っていた。
「達也さんたら、もっと身が堅いと思っていたのに」
順子の大黒を見つめる目が潤んでいた。
「奥さんと早く別れちゃいなよ。いつまでも引きずることはないわ」
順子は大黒の妻が行方不明であることを本人から聞いて知っていた。

大黒と別れてから紀子は、クラブ‐リラ‐のカウンターで一人ビールを飲んでいた。時間は午前二時を過ぎていた。店内には紀子以外に目つきの悪いバーテンが一人だけだった。さっきまでは二、三人の客と店の女の子がいたが、既に帰ったようだ。紀子は三本目のビールをあけていた。ビールはそんなに好きではなかったが、ウィスキーは苦手だし、好みのワインの銘柄は、店に置いていなかった。紀子は別れた大黒のことを考えていた。自分

一人をこんな店に置いていった大黒が、恨めしかった。そろそろ帰ろうとした時、店のドアが開いた。三十代前半のサラリーマン風の男が入ってきた。金縁メガネをかけアタッシュケースを手にしていた。身長は一七五センチといったところで、色白で痩せ型の男だった。男は、紀子と一つ席をあけたところに座った。

「ご旅行ですか？」

男は乾いた声で話しかけた。

「ええ……」

紀子はその男があまり好みではなかった。言葉は丁寧だが、金縁メガネから覗く目が卑らしく感じられた。女のように白く無髪性のような手をした男は生理的に受け入れられなかった。

「どちらからですか？」

「埼玉県です」

紀子は財布を出し、帰る仕度を始めた。

「お帰りですか？残念だな。せっかくお知り合いになれたのに。そうだこの店の名物カクテルはお飲みになりましたか？」

「名物カクテル？」
紀子は少し興味を持ったようだ。
「カシスとボジュレをベースにしたスマートなカクテルですよ」
男は紀子の返事をまたず、バーテンにカクテルを注文した。店内にカクテルをシェイクする音が響いた。すぐに紀子の前に、真紅のカクテルが置かれた。
「失礼ですが、私に奢らせて下さい」
紀子は素直に受けることにした。カクテルを奢ったくらいで男がつけあがるとは思えなかった。
「ありがとう」
礼を言って紀子はカクテルを口に含んだ。芳しい香りとほんのりと甘酸っぱい味がした。
「素敵な味ね」
紀子は多少男に気を許したようだ。
「もう一杯いかがですか？」
紀子は少し考えた。どうせ旅先なのだ。この男は好みではないが、誰もいないよりはマシに思えた。

「頂くわ」

ほどなくして紀子の前のカウンターにカクテルが置かれた。紀子はグラスを手にしようとして、急に目眩を覚えた。そして意識を失いカウンターに突っ伏した。バーテンが慌てて、店の看板を準備中にかえ、ドアをロックした。そして紀子を抱き上げ、ボックス席のシートに仰向けに寝かせた。

「兄貴。早く身体検査をしましょうや」

兄貴と呼ばれたのは、ススキノ一帯を縄張りとする権藤組の若頭、村瀬昭雄であった。村瀬は金縁メガネを胸ポケットにしまった。どうやら伊達メガネのようだ。

「慌てるな。迎えがくるまでまだ二時間もあるんだ」

バーテンは紀子の顔と体を交互に食い入るように見つめた。

「くー、たまんないや。兄貴、こりゃ相当の上玉ですぜ」

「大内、俺にいつものやつをくれないか」

バーテンをしていたのは、権藤組の組員　大内

謙二だった。大内はカウンターに入り、棚からサントリーウィスキー響のボトルを取り出し、オンザロックを作った。村瀬は、背広の上着を脱いで、ワイシャツ姿になった。村瀬は、紀子の値段を値踏みしていた。今までで最高の女だった。これほどの女だとさぞかし、パーティは盛り上がることだろう。ただし、女を裸にして傷や痣がないことを確認した上でのことだ。大内は村瀬の前にグラスを置いた。

「大内、女を裸に剥きな。いや待て。今日はちょっと趣向を変えるか。まずジーンズだけ脱がせろ」

大内は待ってましたとばかりに紀子に近づいた。荒々しい手つきで、ベルトに手をかけ、ジーンズを脱がしていく。

「もうちょっと優しくやれ。大事な商品なんだぞ。ジーンズを脱がしたらソファに座らせろ」

意識のない紀子は為すがままだ。両腕をだらりと下げ、首は壁にもたれるようにして坐わらされた。真っ白い太股とパンティを透かして見える恥毛が、二人の目を釘付けにした。大内のごくりと生唾を

飲みこむ音が聞えた。
カウンター席に腰掛けた村瀬は、響のオンザロックを旨そうに飲み干した。村瀬は自分でグラスに響を注ぎ足した。
「今日の肴は格別旨いな。次は、シャツの前ボタンを外せ。そしてシャツを着せたまま、ブラを外すんだ」
大内のぎこちない手が紀子のシャツのボタンを外していく。紀子を前屈みの姿勢にし、背中のブラのホックを外し、元の姿勢に戻した。紀子はパンティにシャツを着ただけの格好になった。前がはだけているので、シャツの隙間から形のいい乳房が見えた。乳首が、紀子の呼吸に合わせて見え隠れしていた。
大内が今にも食いつきそうな目で紀子の乳房を見つめていた。
「ストリップの最後の仕上げだ。シャツとパンティを脱がせろ」
大内は紀子のシャツに手をかけ、一気に引き裂いた。左腕で紀子の太股を持ち上げ尻を浮かせ、

右手で尻の方からパンティを抜き取った。脱がせたパンティの匂いを嗅ぎ、スラックスのポケットにしまおうとした。

「やめろ、証拠品はすべて処分するんだ」

大内は渋々、パンティとその他の衣服をまとめて、黒いビニール袋に入れた。これは、明日焼却処分にする予定だった。

淡い照明の中、紀子は全裸でソファに座らされていた。二人とも暫し、その美しさに見とれていた。形のいい乳房と腰から下の膨らみは絶品だった。軽く開いた太股の奥に見える恥毛が淫靡な雰囲気を醸し出していた。

「股を開いて、あそこも丹念に調べるんだ」

大内は紀子の前にひざまずき、紀子の太股を目一杯広げ、そこを指で押し開いた。指を入れてしばし感触を味わっていた。そして、やおら顔を近づけ、臭いを嗅いだ。石鹸の香りに混じって微かに汗の臭いがした。恥毛が大内の顎をくすぐっていた。大内の下半身はもう限界寸前だった。

「おい、どうだ？」

「何にも問題は、ないっすよ」

大内の声はうわずっていた。

「女をソファの背もたれの上にうつ伏せにねかせろ。尻を突き出させるんだ」

大内は紀子を抱き起こし、背中合わせにしたソファの背もたれの上に、うつ伏せの姿勢をとらせた。村瀬の方に尻を突き出す格好にさせた。村瀬は立ち上がり、紀子に近づいた。

紀子の傍らで立ち止まり屈みこんだ。目の前には、紀子の豊かな尻があった。シミひとつなく、すべすべでムキ卵のようだった。両手を使い紀子の尻を押し開いた。アヌスに痔疾の跡は見られなかった。尻の脹らみに頬ずりし、尻の間に顔を埋め、臭いを嗅いだ。刺激臭はせず、微かに汗の臭いが感じられた。村瀬は沸々と沸きあがる欲情を何とか押し殺した。

「兄貴、もう限界だ。この女を抱かせてくれ」

「馬鹿野郎！」

村瀬の張り手に大内は突き飛ばされ、カウンターの隅に背中を強かに打ちつけた。

「女は親分が一番に、味見することになっているんだ。忘れたのか」

村瀬はボックス席のテーブルの上に置かれた紀子の所持品である黒いバッグの中身を確認した。メモ帳、財布それに免許証が入っていた。

「柴紀子か、こいつは掘り出し物だ」

財布の中身は確認せず、持ってきたアタッシュケースに放り込んだ。

「今日の売り上げを寄越しな」

大内は背中をさすりながら、カウンターの奥へと消え、黒い布包みを持ってきた。アタッシュケースにそれを入れて、カウンターの奥に消えた。三十分程して、大内は戻ってきた。顔が上気していた。

「ラリッてでもいたのか？」

村瀬は二人掛けのボックス席で、紀子をうつ伏せの状態で膝に乗せ、盛り上がった白い尻をさすりながら響を飲んでいた。

「兄貴、そろそろ別荘からお迎えが来る時間ですよ」

村瀬は壁掛け時計を見るとはなしに見つめた。

「そのようだ」

村瀬は紀子をボックス席にうつ伏せに寝かせ、立ち上がり背広の上着を来た。ちょうどその時ドアをノックする音が店内に響いた。

「兄貴、隆二です。お迎えに参りました」

大内が、ドアの鍵を開けた。隆二と名乗ったのは、権藤組の構成員のひとりだった。隆二は縦百センチ横七十センチ高さ百センチの木製の箱を乗せた台車を押してきた。店内に入りドアに鍵をかけた。隆二は紀子の盛り上がった尻を見詰めた。

「村瀬の兄貴、随分とお楽しみのようですね」

「女は合格だ。早いとこ箱に積めるんだ。夜が明けるぞ」

大内と隆二は紀子を抱え上げ、箱に押し込んだ。箱の中に紀子は膝を抱えるようにして座らされた。これも上が開いた箱の形をした蓋を締め、箱の上に衣服を乱雑に乗せた。これで洗い物を運んでいるように見えるだろう。

「こいつは楽しみだな」

隆二は舌なめずりした。台車を押す隆二と村瀬は店を出た。エレベータに乗り、一階で降りた。ビ

ルの中では誰にも見られなかった。外に止めておいたミニバンに箱を運び入れた。ミニバンの中は、運転席と助手席以外取り外されて、後部はすべて荷台となっていた。その中央に箱をロープで固定した。ミニバンは定山渓方向に向かって走り出した。

スナック順子で紀子に電話してから二日が過ぎようとしていた。大黒は、いつもどおり会社に出社した。仕事は退屈なものに思えていた。連絡が取れない紀子の事が気がかりだった。それとも紀子は、偽りの電話番号を教えたのだろうか。大黒は体調がすぐれないという理由で、午後から有給をとった。大黒が勤める会社は、有給の使用には比較的緩やかだった。大黒は西野にある自宅に戻り、電話機をとり紀子の電話番号をダイヤルした。三回の呼び出し音の後、

「はい、柴です」

という女性の声で返事が帰ってきた。ただし大黒の記憶にある紀子の声とは違っていた。

「紀子さんをお願いしたいんですが」
少し沈黙の時間が続いた。
「……どちら様でしょうか？」
「札幌の大黒です」
つい大黒は本名を言ってしまった。
「札幌からですか。……あの、紀子まだ戻っていないんです。紀子とはどういったご関係ですか？」
電話口から途方に暮れた女のため息が、聞こえた。
「戻っていないって、旅行からですか？紀子さんとはちょっとした知り合いです」
「そうなんです。私と北海道旅行中に札幌で行方が分からなくなったんです。一週間ほど前に喧嘩別れしてから宿泊先のホテルにも戻らなかったんです。私はどうしても外せない用事があったので帰ったんですが」
「そうだったんですか。彼女が行方不明になった日だと思いますが、実は紀子さんとお会いしたんです」
「そうですか。あの、申し遅れましたが私、紀子

の姉の原美樹と申します。何か胸騒ぎがするんです。紀子が何かトラブルに巻き込まれているような。

……電話では何ですのでこれから私札幌に参ります」

大黒は事の以外な展開に戸惑っていた。紀子が行方不明と聞いて言い知れぬ不安にかられていた。

「わかりました。千歳空港まで迎えに行きましょうか？」

「いや、連絡先の電話番号を教えて下さい。宿泊先のホテルからご連絡します」

「011-***-****です。今日立つのですか？」

「夕方の便で向かうつもりです。ご連絡するのは明日になると思います」

「では、連絡をお待ちしています」

大黒は受話器を置いた。大黒は紀子と別れた時の事を思い出していた。特に変わった様子はなかった。翌朝大黒は九時に起き、上司に今日一日休む事を伝えた。元々ほとんど有給を取らない大黒であったので、上司は何も言わなかった。コーヒ

ーとトーストのみの軽い食事を取り、電話がある居間でテレビを見ていた。午前十時、電話のベルが鳴った。

「はい、大黒です」

「もしもし、原美樹です。昨日はどうも。今Gホテルから電話しています。これからお会いできませんか？」

もちろん大黒はそのつもりであった。

「わかりました」

「ホテルの一階にあるカフェ-デボアでお待ちしています。目印に薄いピンク色のスカーフをテーブルに置いておきます」

受話器を置いて、大黒はスラックスとカッターシャツに紺のブレザーを着て家を出た。オデッセイに乗りGホテルを目指した。大黒の住む家がある西野からは交通事情がよければ二十分程の距離だった。ホテルの地下駐車場に車を停め、一階にあるカフェデボアに向かった。店内は、客でほぼ満席の状態であった。係りの案内を断り、店の奥に向かった。ピンク色のスカーフが目に入った。

大黒は確信を持ってその席に向かった。席には紀子によく似た女が座っていた。紀子が言うような不美人ではなかった。年齢は二十代半ばに見えた。紀子とさほど歳は離れていないようだ。紀子に匹敵するほどの美貌の持ち主だった。

「大黒と申します。原美樹さんでしょうか？」

女は大黒をじっと見つめた。

「はい」

大黒は開いている方の席に座った。ウェートレスが注文を聞きに来た。

「ホットコーヒーを頼む」

美樹は大黒をじっと見詰めていた。まるで観察しているかのようだった。美樹は大黒が悪い人間には見えなかったが、昨日電話で知ったばかりなのだ。

「妹との関係を説明していただけませんでしょうか」

美樹の声はどこか非難めいていた。

「紀子さんとは、偶然のきっかけでお会いすることになりました。私が勤務する会社の近くでトイ

レを捜していたのです。ススキノで食事をご一緒しました。それだけです」

大黒は当然ラブホテルの件は話さなかった。

「私の方からも一つ質問してよろしいですか。紀子さんのご主人はどうして来られないのですか？」

「義弟は今商用でヨーロッパに行っておりまして、連絡がつかないのです」

「そうですか」

ウェートレスが大黒のコーヒーを運んできた。

「妹とはどこで別れたんですか？」

「確か、ススキノにあるクラブ-リラ-というスナックです」

美樹は赤い表紙の小さなメモ帳を取り出した。

「その店の住所を教えて下さい」

「それでしたら、これからご案内しますよ」

「わかりました。お願いします」

大黒は勘定書きをとり出口に向かった。美樹がその後についてきた。Gホテルからリラまでは距離にして一キロメートル程で、車ですぐの距離だ

った。リラが入っているビルの手前の路肩に車を停めた。

「このビルの三階にクラブ‐リラ‐があります。住所は中央区南五西三丁目です」

美樹は先ほどの赤いメモ帳を取り出し、この地区の特徴をメモしていた。

「これからどうするつもりですか？」

「調べたいことがあるので、二、三日逗留するつもりです。あのホテルまで送っていただけないでしょうか」

大黒は、車を発進させホテルの方角へ向かって走り出した。車内ではホテルにつくまでの数分間沈黙が続いていた。美樹を送り届けてから大黒は自宅に戻った。美樹から連絡がある可能性があったので、後二、三日有給を取ることにした。会社に電話をかけ上司に有給の件を話した。さすがに色好い返事ではなかったが、半ば強引に押し通した。大黒はここ半年の間、会社を辞める準備をしていた。宮仕えにはそろそろうんざりしていた。ひとり、探偵事務所を開くつもりだった。資格も既に

取得していた。資金は家と土地を手放して作るつもりだった。西野には親から引き継いだ土地百坪と最近新築した建坪五十坪ほどの家を持っていた。ひとりで生活するには広すぎた。家と土地の件は、地元の不動産会社に既に委託しており、近々中に契約が成立する予定だった。周辺の地価を考えると最低でも四千万円にはなるはずだ。

ひとり娘は、当分の間、姉の家に預かってもらうことにしていた。姉夫婦に子供はなく、娘を本当に可愛がってくれた。

その日は、ビールを飲みながら終日ぼんやりとして過ごしていた。

翌朝は土砂降りの雨が降っていた。親子電話の子機のベルがなった時、大黒はベッドで眠っていた。シャワーを浴びてすぐ寝たので何も身に付けていなかった。もっとも一人暮らしなので誰の目も気にすることはなかったが。大黒は受話器を取った。

「もしもし、大黒です」

「原です。突然電話してご免なさい。急なんです

けど今会えませんか？」

「いいですけど。どこにします」

大黒は受話器を顎ではさみながらパンツをはいた。

「実は貴方の家の近くまできているんです。これ携帯なの。貴方の家ではどう？」

大黒は昨日、美樹に、自宅の住所を教えたことを思い出した。

「わかりました。でも散らかっていますよ」

大黒は急いで衣服を身につけた。居間に行きカーテンを開けた時、家の前にタクシーが停まるのを認めた。紺のワンピースに身を包んだ美樹がタクシーを降りた。雨は小降りになっていた。

大黒の自宅の居間で美樹はソファに座っていた。大黒はキッチンで、コーヒーを煎れた。

「突然お邪魔して済みません」

大黒は美樹の前のテーブルにコーヒーを置いた。

「散らかっているでしょう。男の一人暮らしなんてこんなもんです」

美樹はコーヒーカップを口に運んだ。
「いえ清潔にしてらっしゃるわ。一人暮らしって、失礼ですけど独身ですか？」
「いえ、事情がありまして妻とは、今別居中なんです」
大黒は美樹の顔色を伺った。昨日よりはだいぶ打ち解けたようだ。
「そうですか。あのところで紀子の事なんですけど。実は昨夜、あのスナックに行ってみたんです」
大黒は身を乗り出した。美樹の真っ白な膝が目に入ってすぐに視線を外した。
「で、どうでした。何かわかりましたか？」
「店は準備中で、店の女の子がひとりいるだけでした。彼女は紀子の事は覚えていました。若い女性が一人で来ることは珍しいので、覚えていたそうです。彼女が帰る時は、まだ、ひとりで飲んでいたそうです」
「それからどうしたんですか？」
紀子はコーヒーカップの縁を指でなぞりながら、
「彼女と話していた時、店の奥からバーテンが出

てきたんです。目つきの悪い男でした。私恐がりなもので、その男とは話ができず、すぐ店を飛び出しました」

「そうですか。紀子さんはやはりあの店で飲んでいたんですか。ああコーヒーのお代わりどうですか？」

「いただきます」

大黒はキッチンに入り、コーヒーブレーカに保温しておいたコーヒーを美樹のカップに注いだ。振り返った時、そこに美樹がいた。

「あの、お部屋見せていただいていいでしょうか？」

「紀子さんはいませんよ」

大黒が冗談のつもりで言った。

「一応確認しませんと」

美樹も応酬した。一階には居間以外にキッチン、バストイレそして寝室が一間あり二階には寝室が四間の間取りとなっていた。美樹は一階の寝室に入ろうとした。

「そこはまずいな」

「駄目ですか？」

「お気を悪くしますよ」

美樹は寝室のドアを開けた。中に入り辺りを見回した。床に洗濯物が散乱していた。洗濯は済んでいるのだがまだ、洋ダンスに仕舞っていなかった。美樹は男物のパンツを目にしていた。美樹は部屋を出た。

「独身男性の生活ってこんな感じなのね。下着も自分で洗うんですか？」

特に不快を感じた様子はなかった。

「二階に寝室が四部屋あります。そちらも見ますか？」

「いや、気が済みました。貴方の家に隠れてくれたらよかったのに」

二人は居間のソファに戻った。

「私の家の寝室を見に来た訳ではないですよね」

美樹は冷めてしまったコーヒーを一口飲んだ。

「妹が何かトラブルに巻き込まれていると思うんです。これは女の感ですけど、あのスナックが関係しているような気がしています」

「クラブ・リラ・のことですか？」
美樹は深く頷いた。そして遠くを見つめるような目をした。
「残念ですけど、私、妹を捜してやれないのです。どうしても帰らなければならない事情がありまして」
「そうですか」
美樹は身を乗り出して、大黒の節くれ立った手のひらを両手で握り締めた。
「貴方にお願いがあります。紀子を捜していただきたいのです。こちらには貴方しか知り合いがおりません。それに一応、埼玉で心当たりのところを当たってみます」
大黒は美樹の美貌と、甘い息に我を忘れそうになった。
「警察には届けたのですか？」
「札幌でも、家出とかで年に何人もの捜索願があるそうです。それらに一々取り合っていられないというような意味のことを言われましたわ」
警察では成人の捜索願は、一応受理するが事件

の確証がない場合何もしないのが通常だった。
「お姉さんに言われる前から、私はそのつもりでした。助けになるかどうか分かりませんが、見つけたら必ず貴方のところへ連れていきます」
美樹は大黒の手を放し、深々と頭を下げた。
「妹のことをよろしくお願いします」
美樹は立ち上がり帰る支度を始めた。
「送りましょうか？」
「いや実はタクシーを待たせてあるの。私が三十分して戻らなかったら通報してもらうように頼んでいたんです」
美樹は悪戯っぽい笑みを見せた。
「やられたな」
去り際に、大黒に軽く手を振って会釈をした。そしてタクシーに乗り去っていった。雨は止み、抜けるような青空が広がっていた。

第三章　陵　辱

紀子を運ぶミニバンが、権藤組のアジトである別荘に着いたのは、午前六時前だった。そこは、

中山峠の近くにある林道を五キロほど奥に行ったところにあった。周囲を原生林に囲まれ、外界とは隔てられていた。組員以外に訪れる者はいなかった。木造二階立て、洋館風の作りをしていた。

別荘の前庭にある駐車場に、ミニバンが止った。別荘から二人、権藤組の組員が出てきた。一人は滝一哉、もう一人は大滝修司という男達であり、組では中堅どころである。二人とも屈強な体を持ち、見るからに残虐な風貌をしていた。

「村瀬の兄貴、ご苦労様です」

村瀬は車から降り、タバコを咥え、火をつけた。

「女を降ろせ」

運転をしていた岡隆二とその二人で、ミニバンから紀子が入った木箱を降ろし、別荘の中に運びこんだ。別荘の間取りは一階に、二十帖の居間、六帖の洋間が二部屋、その他にキッチン、バス、トイレがあり、二階は六帖の洋間が、三部屋設けられていた。

他に地下室があるのだが普段は使われておらず、それに続く階下にあるドアは堅く施錠されていた。

各部屋は、さらわれてきた女の見張り役である組員が使用した。女には、部屋は与えられなかった。寝るときは組員のベッドで抱かれて寝た。各部屋ともに内側から鉄格子をはめており、鉄格子と窓の間にはレースのカーテンを張り、鉄格子を隠していた。別荘への出入りは、駐車場に面した正面玄関のみとなっており、裏口はなかった。紀子が入れられた木箱は、居間の隅に据えられた。村瀬はスーツケースの中身であるリラの一日の売上金を部屋の壁に埋め込まれた隠し金庫にしまった。

「村瀬の兄貴、そろそろショーを始めませんか？女もそろそろ目を覚ます頃ですぜ」

「そうだな、準備を始めろ」

男たちは居間の中央にあるソファやガラステーブルを部屋の隅に運んだ。居間には絨毯を敷いておらず、フローリングの床だった。木箱を部屋の中央に移し、隆二が蓋を開けた。部屋の中に微かな香水と女が発する体臭が広がった。男達は木箱の中を上から覗いた。紀子は入れられた時のままの姿勢で眠っていた。修司と一哉が二人で、紀子

を抱えあげ、素っ裸の紀子を床に、うつ伏せの姿勢で寝かせた。染みひとつない豊かな白い尻の盛り上がりに男達はため息を漏らした。唾を飲み込む者もいた。隆二が堪らず、紀子の尻にむしゃぶりついた。尻の盛り上がりや深い合間に舌を這わせた。他の二人も紀子の乳房を舌で愛撫し、股間に指を入れかき回した。

「お前ら、その位にして女から離れろ」

周りの気配にただならぬものを感じたのか、紀子は目を覚ました。

「お目覚めのようだな。柴紀子」

紀子は自分が全裸であり、凶悪な顔つきをした男達に囲まれていることに気づいた。男性自身をしごいているものもいた。紀子は床に座り、胸の膨らみを男達の目から隠した。なぜ自分が今このような状況にあるか記憶を呼び戻そうとしていたが、リラでカクテルを飲んだところまでの記憶しかなかった。恐怖のあまり体中が震え、言葉も出ない状態だった。

「お前には今日から、権藤組が主催する乱交パー

ティの主役になってもらう」
「給料は出ないが、三食の食事と、俺達と好きなだけセックスが楽しめる」
隆二が横から口を出した。村瀬は紀子に近づいて、紀子の髪の毛を掴みあげた。
「後三時間もしたら組長がやってくる。お前はまず組長に仕えるんだ。言っておくが決して、逆らうなよ。言われたままにするんだ。そうでなければ、死ぬことになるぞ」
隆二も紀子に近づき、胸を隠している紀子の腕を振り払い、乳房にドスを突きつけた。
「前に一度、組長に逆らった女がいた。そしたら組長は、その女の乳首をドスで切り落とし、あそこにドスを捻じ込んだんだ。女はそれでも死にきれなかったんで、台所から特大の擂り粉木を持ってきて女のアヌスに突き刺した。五十センチはあるやつを全部突っ込んだんだぜ」
隆二はドスの峰で紀子の股間を軽く叩いた。
「その時の擂り粉木がこれだ。女は裏山に眠っているよ」

一哉は隠していた擂り粉木を右手に持ち、後ろから左手で紀子の肩を押し付けた。紀子は一哉に対し尻を突き出す恰好となった。擂り粉木の先端を紀子のアヌスに十ミリほど沈み込ませた。

「助・け・て」

紀子は喘ぎ声を漏らし、白目を剥きそのまま失神してしまった。紀子の股間から液体が漏れ出し、床を伝わっていった。大滝は指をその液体に浸し、その指を舐めてみた。

「小便ちびりやがったぜ。美人は小便も旨いな」

「変態か？お前」

村瀬は呆れ顔をして、ソファに腰掛けた。

「和美、雑巾とタオルを持ってこっちに来い」

キッチンで、食事の支度をしていた和美が、呼ばれた。和美も紀子同様さらわれてきた身だ。　歳は二十代の中頃といったところだ。紀子には劣るが中々の美人だった。紀子同様にリラで身体検査を受けたのだが、腹に帝王切開の跡があったので、パーティには出されず、ここで男達の食事と下の世話をさせられることになった。和美は黒のネグ

リジェを着ていた。下にはブラジャーもパンティも身につけていなかった。全裸のまま失神している紀子をちらっと見て傍らに膝をついた。紀子の股を広げ、その間から雑巾で床の汚れを拭き取っていった。前屈みの姿勢なので、尻が丸見えとなり男達の欲情を誘った。男達はそれぞれソファに座りくつろいだかっこうをして見ていた。隆二が余興を思い付いた。

「床が済んだら。女の股をきれいにしてやれ」

和美は、タオルで紀子の股間を拭こうとした。

「違う。タオルじゃなくてお前の口を使うんだ」

和美は一瞬隆二の方を振り向き、ちょっとの間を置いて無言のまま頷いた。和美はうつ伏せになって失神している紀子を仰向けに寝かせ、太股を押し開き、舌で膣周辺の汚れを舐めとっていった。アンモニアと汗の味が口内に広がったが、大して気にならなかった。ここに連れてこられて以来、こんな事は日常茶飯時だった。

「よし、その辺でいい。隆二、女を風呂まで運べ」

村瀬の命令で隆二は軽々と、紀子の尻が前を向

くように右肩に担ぎ上げ、左手で尻を撫で回した。
「たまんないっすね。和美。ぼさっとしてないでついてきな」
和美は立ちあがり、隆二の後に続いた。和美の背中に村瀬が声をかけた。
「和美、尻の穴の奥まで念入りに洗うんだ。親分は清潔好きだからな」

大黒は美樹と別れた日にスナック順子に足を運んだ。時刻は午後六時を少し回ったところで、店にはママの順子一人で、店の女の娘も客もひとりも来ていなかった。
「あら、いらっしゃい。紀子さんとは連絡がついた？」
大黒はカウンター席に座った。
「まだだよ。だけど彼女のお姉さんに会った」
順子は氷をクラッシュする手を止め、アイスピックをカウンターの上に置いた。
「えっ、どうしてお姉さんと？」
「彼女まだ帰っていないだ。彼女の家に電話した

らお姉さんが出たんだ。色々聞かれてね。それでお姉さんが捜しに来たというわけさ」
順子は大黒のボトルとグラスを運んできた。
「帰っていないって、行方不明ということ？」
大黒はグラスに注がれたジャックダニエルを一口含んだ。
「そうなんだ。それでお姉さんを彼女と別れた店まで案内してやったんだよ」
「ちょっと待って、その店の名前なんて言うの。私もまだ聞いていなかったわ」
「三丁目ビルにあるクラブ‘リラ’という店だよ」
店の名を聞いて順子は、押し黙ってしまった。
「どうしたんだい？」
順子のグラスにジャックダニエルを注いでやった。
「その店はまずいわよ。紀子さんはトラブルに巻き込まれた可能性があるわね」
大黒は、身を乗り出した。
「何か知っているのかい？」
順子はグラスを口に運んだ。

「達也さんは、暴力団の権藤組って知っているかな。最近急に勢いをつけてきた組でね。相当悪辣な商売をしているそうよ。その権藤組が経営している店だという事はこの界隈では有名な話よ」

順子はさらにグラスを口に運び一気に飲み干した。

「最近変な噂を耳にしたわ。ススキノで、この半年の間に旅行者ばかり、それもとびきりの美女が失踪しているらしいの」

「本当かい？」

大黒は事件解決の糸口を必死に探りだそうとしていた。大黒はクラブ"リラ"を徹底的に調べることに決めた。

九月二十五日金曜日、紀子が失踪してから一週間が過ぎようとしていた。昨夜から大黒は自宅の一室である作業を続けていた。超小型のワイヤレス発信器を百円ライターに埋め込む作業だった。通信範囲は百メートルで一週間動作する優れものであった。

インターネットの企業情報を使用して、権藤組の規模等の情報を収集した。スナック順子のママの情報では権藤組は、表向きには建設業を営んでいた。権藤組という会社であって社員はすべて権藤組の構成員だった。従業員は五十八人となっていた。

代表者名は権藤龍一となっていた。住所は丸山公園四丁目であった。大黒はこれらの情報をフロッピーディスクにダウンロードした。大黒はクラブ"リラ"に行くことに決めた。

その夜、十時過ぎ大黒はクラブ"リラ"のドアを開けた。花の金曜日ということもあってか、店はほぼ満席であった。大黒はカウンター席が一席開いていたので、そこに座ることにした。サラリーマン風の客が、カラオケで演歌を歌っていた。特にこの店が怪しい印象は受けなかった。

大黒はサントリウィスキーオールドの水割りを注文した。パンティが見えそうなミニスカートをはいた二十歳位の店の娘が、水割りを作りグラスを大黒の前に置いた。

「お客さんこの店初めてね。私、美由紀っていいます。後一時間もしたら店は空くからそれまでゆっくり飲んでいて」

娘は意味深な笑みを浮かべ、ボックス席の客に呼ばれていった。ボックス席ではその筋と思われる人相の悪い客が三人で飲んでいた。美由紀はその一人の客に抱かれるようにして座った。美由紀のパンティにその客の手が入れられているように見えた。一時間ほどして、美由紀が戻って来た。

「ああ、嫌な客が帰ったわ」

美由紀は、大黒の席の左隣りに座った。

「何か飲む？」

「よく冷えたビールがいいな」

大黒はカウンターの裏で皿洗いをしていたバーテンにビールを注文した。

午後十一時、店にはその娘と目つきの悪いバーテンと大黒の三人だけになっていた。

「お客さん歳幾つ？三十歳位かな」

「お世辞を言っても何も出ないよ。今年で三十七歳になるんだ」

美由紀はバーテンが運んできたビールを一息に飲み干した。

「同じのでいいかい？」

「いえ、いいわ。お客さんこの辺では見ない客ね。旅行者なの？」

「そう見えるのか。じゃそういうことにしておこう」

美由紀はバーテンの目を盗むように大黒の左の太股に手を置いた。

「私けっこう酔っちゃった」

美由紀は、スラックスの上から大黒の股間を撫で上げた。バーテンがカウンターの奥に消えた。

「お客さん名前何て言うの？」

「大黒達也」

美由紀は、大黒の肩から胸にかけて右手をゆっくりと滑らしていった。

「いい身体しているわね。私、大黒さんのような体が好みなの。運命って皮肉なものね。好きなタイプに巡り会わなくて。私が今付きあっているのは、痩せて鳥殻のような男なの」

大黒は美由紀の太股を撫でてやった。
「いい気持ち、店が終わったら会えないかしら。私は十二時までなの」
大黒は、美由紀の唇に軽いキスをした。
「いいよ。ホテルリッツ一階にあるバーラウンジで待っている」
大黒は奥のバーテンを呼んだ。カウンターを立つ際にカウンター席の隙間に、超高感度マイクを仕込んだ百円ライターをそっと挟み込んだ。バーテンが渡した請求書には五万円と書かれてあった。
「水割り三杯とビール一杯で五万円かい」
バーテンはじろりと大黒を睨みつけた。
「わかったよ」
大黒は財布から万札を五枚抜き取りバーテンに手渡した。
「美由紀のサービス料は負けといた」
バーテンはニヤリと薄気味の悪い笑みを浮かべた。大黒はクラブ"リラ"を後にした。
午後十一時三十分、大黒はリラを出てすぐに、隣接するホテルリッツに入った。フロントでツイン

の部屋をとり、一階にあるバーラウンジに向かった。

バーでは大黒は窓際の席をとりビールとチーズを注文した。大黒は盗聴器の受信機のスイッチを入れ、イヤホンを右耳に入れた。その時イヤホンから美由紀の声が聞えた。感度は非常に良かった。

「お先に失礼します」

「お疲れさん」

後から聞えたのはあのバーテンの声だとわかった。声に聞き覚えがあった。

もうすぐ美由紀はやってくるはずだ。大黒は美由紀から何かしらの情報を得ようとしていた。大黒は盗聴機を録音モードにし、イヤホンを胸のポケットにしまいこんだ。ウェーターがビールとチーズを運んできた。大黒はチーズをつまみながら美由紀がやってくるのを待っていた。

「お待たせ」

振り向くと美由紀が立っていた。黒のブラウスにタイトスカート、それにレースのガウンを羽織っており、先ほどとは違いシックな恰好をしていた。

美由紀は隣の席に座った。
「お腹好いただろう。何か食べるかい？」
「いや、店で軽い食事をとったのでお腹は空いていないわ」
「じゃ何か飲む？」
「ビールを飲みたいんだけど、ホテルの部屋で貴方と二人きりになってから飲みたいな」
二人は、バーラウンジを出て大黒がとった部屋に向かった。部屋に入るなり美由紀は大黒の唇を求めてきた。相手の口に舌を入れるヘビーなやつだ。大黒はそっと優しく美由紀から離れた。
「先にシャワーを浴びていいよ」
「貴方と一緒に浴びたいな」
円らな二重瞼を輝かせ、甘えた声を出した。
「わかった。先に入っていてくれ。すぐ行くから」
美由紀がシャワールームに入るのを確認して、盗聴機の受信装置をベッドの下に隠した。大黒は、全裸になりバスルームに入った。中では美由紀がバスタブにお湯をためながら体を洗っていた。大黒がバスタブに入ると美由紀は大黒の体を隅々ま

で洗い始めた。大黒は美由紀に身を任せていた。

「大黒さん独身じゃないわよね」

「ああ、妻子持ちさ」

美由紀は大黒の全身を洗い終えると、大黒の股間に顔を近づけ大黒自身を口に咥え味わうように喉を鳴らした。大黒は美由紀のセミロングの髪を両手で掴み、軽く腰を動かした。十分ほど美由紀の好きにさせた。射精感を覚えたので、美由紀を引き離し二人でバスルームを出た。二人ともタオルも纏わずに二人掛けのソファに座った。美由紀が冷蔵庫からビールを取り出し、栓を抜いた。グラスは冷蔵庫の上にふたつ置かれていた。

「あの店は長いの？」

「いや、勤めてからまだ一ヶ月よ」

大黒はビールを一息で飲み干した。美由紀が注ぎ足してくれた。

「あの店って、若者の客が少ないね。女の子がひとりでは行き難い感じだ」

「そうね。すけべなおやじばかりよ。そいえば最近変な客が来たな。誰かを捜していたみたい」

「ふーん」
大黒は気のない返事を装った。
「どんな人？」
「凄い美人。その女性が捜していた女性も美人だったような気がしたわ。美人と聞いて興味が湧いたの？」
「多少ね。男でも待っていたのかな」
大黒は冷蔵庫からビールをもう一本出し、栓を抜き美由紀のグラスについでやった。
「分からないわ。私が帰るときは一人で飲んでいたけど」
「どんな服装をしていた？」
「そうね。ジャケットにジーンズをはいていたわ。……貴方探偵か、何かなの？」
「違うよ」
大黒は彼女を抱き上げベッドに運んだ。そして彼女の体の隅から隅までを舌と指で愛撫した。クリトリスへの舌による愛撫だけで彼女は絶頂に達した。
最後に大黒は美由紀の尻を抱え後ろから挿入し

た。五分ほどで美由紀は二度目の絶頂を迎えた。大黒も彼女の中に放った。美由紀はピルを常飲しているとのことだった。美由紀はうつ伏せのまま五分ほど動かなかった。余韻を楽しんでいるのだろう。その後二人でシャワーを浴びた。そこでも美由紀は求めてきた。美由紀は三度目の絶頂を迎えた。シャワーから上がり、二人でベッドに横になった。大黒は仰向けの姿勢で、美由紀は大黒の左腕に頭をのせ大黒の方を向き横になっていた。美由紀の左手が大黒の股間を弄っていた。

「君、タバコは吸わないの？」

「貴方も吸わないのね」

「ところで、君には悪いがあの店は最悪だね」

「そのとおりよ。給料がいいんで我慢しているの」

大黒は美由紀の方に横向きになり、美由紀の豊かな尻の間に右手を差し入れた。美由紀の頬や口に優しいキスをした。右手を尻から膣の方に移動させ指先で軽く、触れるか触れないぐらいでタッチした。美由紀の口から喘ぎ声が漏れた。美由紀は目を閉じていた。

「あのバーテン態度悪いな。名前なんていったっけ。さっき店で聞いたんだけど忘れたな」
「大内のこと。虫けらよ。あいつとは。関わらない方がいいわ」
大黒は右手の指先を美由紀の膣に入れゆっくりとグラインドさせた。
「あいつと何かあったのかい」
「前にお酒を無理矢理飲まされ、あいつのアパートに連れ込まれたことがあったの。そこで好きなだけ犯されたわ」
「アパートってどこにあるの？」
大黒が、なぜそんな事を聞くのか美由紀は疑問に思わなかった。心は大黒の指先に集中していた。
「中島公園のすぐ裏、公園ハイツっていうところよ。あいつの事なんか思い出させないで」
大黒は予想していた以上の大きな収穫に満足していた。大黒は美由紀の股間に頭を入れ、クリトリスを舌で愛撫し始めた。美由紀は快感に身を任せていた。
美由紀は大黒の隣で寝入っていた。大黒はベッ

ドの下から盗聴機を取り出しスイッチを入れイヤホンを右耳に付けた。何も聞こえなかった。午前三時皆帰ったのだろうか。大黒は再生モードにした。客の取り留めのない会話や笑い声が聞こえてきた。それでも大黒はじっと聞き入っていた。途中からまったく何も聞こえなくなった。客は皆帰ったらしい。時々誰かが咳き込む音が聞こえた。テープの最後近くになってドアが開けられる音が聞こえた。

「兄貴、ご苦労さんです」

「大内、いつものやつを頼む」

大内と呼ばれたのは、美由紀の話ではバーテンの事だ。グラスに氷が入れられる音がした。

「兄貴、今日の売り上げです」

会話はそれっきりで途切れた。

大黒はテープを止めた。イヤホンから、先ほどの会話の主の声が聞こえた。

「大内、帰るぞ」

「ご苦労様です」

ドアが開き閉まる音が聞こえた。大黒はイヤホ

ンを外し盗聴器のスイッチを切った。隣からは美由紀の寝息が聞こえていた。大黒は目を閉じ情報の整理を始めた。美由紀の話によると紀子の姉美樹が言ったように、紀子がリラで飲んでいたことは確実であった。さらにバーテンのアパートの場所も知ることができた。これは何かの役に立ちそうな気がした。盗聴器からの情報によると午前三時くらいまで営業をしていること。名前は不明だが、集金係がいる事である。これらの情報をどのように生かすべきかを考えていた。そのうちに大黒も寝入っていた。

大黒は夢を見ていた。紀子とラブホテルで愛しあった時の再現だった。大黒が紀子の中に射精した時、夢が醒めた。目の前に真っ白い尻が見えた。美由紀が大黒の胸に座り男根を口に含んでいた。どうやら美由紀の口に放ったらしい。

「目が醒めた。貴方が寝ているうちに悪戯しちゃった」

美由紀の口からは栗の花に似た臭いがした。

「美味しかったわ。また食べさせて」

ふたりでシャワーを浴び、一階にあるレストランで朝食をとった。
スクランブルエッグにトーストとコーヒーのセットだ。コーヒーを飲みながら大黒は美由紀を観察していた。
さっと化粧をしただけの素顔に近い顔は、若さに溢れ、美しかった。美由紀は朝食をきれいに平らげた。
「朝起きて運動したせいか、お腹空いちゃった」
美由紀は意味深な笑みを浮かべた。
大黒はスクランブルエッグにはほとんど箸を付けなかった。
「それ食べていい？」
「いいよ。朝は小食なんだ。歳だからね」
「ベッドの上では別人という訳ね」
美由紀は意味深な笑みを浮かべた。
朝食を終え、二人は部屋に戻った。大黒はその気になっていた。
美由紀を全裸にし、うつ伏せにして、尻から犯し始めた。二人はチェックアウトぎりぎりまでお互

いを貪りあった。

ホテルのロビーで大黒は美由紀に電話番号を教えた。美由紀からまだ情報が得られる期待があった。

「札幌の人なんだ。電話していい？」

「いいよ。ここ二、三日は留守にしているけどね。君の連絡先も教えてよ」

美由紀は大黒にメモを渡した。

「さようなら、また会ってね」

大黒は少しの間美由紀の魅力的な後ろ姿を見つめていた。美由紀が去ってから大黒はフロントで連泊することを伝えた。部屋に戻り収集した情報をメモ帳に記入した。それから西野の自宅にいったん戻り、インターネットの企業情報で権藤組の情報収集を続けた。

午後八時、ホテルに戻り、盗聴機のスイッチを入れリラの様子を伺った。その日は大した進展はなかった。盗聴を続けてから三日目の午前三時、いつものように集金係がやってきた。集金係の名前が村瀬ということは盗聴によって知った。

「兄貴、パーティはどうでした？」

「盛況だった。今日一日で三千万の売り上げがあったぞ。いつものやつを頼む」
それからグラスに氷を入れる音が聞こえた。
「あの女の調子はどうですか？」
「紀子か。凄い人気だ。まったく、金のなる木だよ」
「兄貴、俺にも別荘の監視をさせてもらえませんかね」
「組長に話してもいいが、駄目だろうな。三日後にはお前が別荘に食料を運ぶことになっているだろ？その時、隆二に相談するんだな。紀子の尻の穴くらいは舐めさせてもらえるかもな」
会話はそれだけだった。紀子という女の姓は確認できなかったがほぼ間違いないだろう。
紀子が別荘というところに捕らわれていることは確実となった。
別荘の場所をバーテンが知っているらしいことが確認できた。大黒は情報の重要さに興奮していた。
警察に知らせるべきか迷ったが、警察が介入した時点で紀子は始末される可能性があった。大黒は

これほど熱中している自分を不思議に思った。暴力団が絡んでいれば大黒も無事で済まない筈だ。紀子に惚れたのだろうか。大黒には今守るべきものは何も無かった。家庭を持っていたなら別の解決策を選択した筈だ。大黒自身はもう引き返せないところに来ていた。紀子を独力で取り返すことに決めた。

その日の朝ホテルを引き払い自宅に戻った。バーテンのアパートの住所、組事務所の住所等の権藤組に関する知りうる限りの情報は収集していた。会社にはすでに退職願いを出していた。

紀子が失神から覚めたのは、風呂の中だった。床にうつ伏せになっていた。何者かが紀子の背中を流していた。二十代半ばぐらいの女が、黙々とボディーソープを染み込ませたスポンジを動かしていた。和美は紀子が失神から覚めたのには気づいていたが、話しかけようとしなかった。スポンジが背中から尻の丸みに移っていった。そこでスポンジを置きボディーソープをつけた人差し指を

紀子のアヌスに指の付け根まで入れ動かした。紀子は腰を浮かせ小さな喘ぎ声を漏らした。尻を入念に洗ってから次に仰向けにされ、爪先から太股、上半身のいたるところをスポンジで磨かれた。最後に和美は紀子の膣に一差し指を入れ緩やかにグラインドさせた。和美は紀子を嬲ってやる気になっていた。和美としては厳つい男どもよりは、美しいこの女に興味があった。

「逝ってもいいのよ」

紀子は湧き上がる快感に身を委ねていた。

その時、風呂のドアが開けられた。そこに隆二が締まりの無い顔をして立っていた。

「和美、その位にしておけ、その女は親分が一番に味見するんだ」

「私はただ、この女のあそこを洗っていただけです」

和美は隆二の目を見ないようにして小さな声で呟いた。

「わかった。そろそろ上がれ。準備があるんだ」

風呂から上がり紀子は、二階の寝室の一室に連れ

込まれた。隆二は紀子を抱えあげ、部屋の中央にあるベッドにうつ伏せに寝かせた。両手両足をベッドの足に紐で縛り付けた。両足は開きっており、盛り上がった尻とその割れ目にあるアヌスが丸見えになった。尻の割れ目が寒々と感じていた。

「もう少しで親分が来る。さっきも言ったように親分には逆らうな」

権藤組組長の権藤明がその部屋にやってきたのは、それから三十分後だった。

権藤は、見上げるような大男だった。二メートル近くはあるだろう。体中が分厚い筋肉で覆われており体重は優に二百キログラムを越えているだろう。無言のままベッドに縛り付けられた紀子の盛り上がった白い尻を見つめていた。

紀子はこの男が擂り粉木で女を嬲り殺したことを思うと、また震えがとまらなくなった。

権藤は、着ている服をすべて脱ぎ捨て、紀子の傍らに仁王立ちになった。

馬並みの巨根の持ち主だった。それが完全に勃起していた。三十センチはあり、黒々としていて、

先端部が体液で濡れていた。紀子に欲情している証拠だ。

紀子の視線は権藤の股間に釘付けとなった。視線を外そうにも外せなかった。あんなもので責められたら膣がもたないと思った。権藤の顔が紀子の首筋に近付いていった。権藤は紀子の尻を除いて、首から背中そして爪先までを入念に舌で愛撫していった。最後まで残していた尻の割れ目に舌を入れた。

アヌスに舌先を押し付け、強引に捻じり込んだ。ざらついた舌の感覚が広がっていった。暫くそうしていると紀子は啜り泣きの声を上げ始めた。

十分ほどその愛撫を続けた後で権藤は紀子から離れ、脱いだ背広の下からドスを取り出した。ドスを右手に持ち紀子に近づいた。紀子は反対側を向いていたので気がつかなかった。権藤はドスの峰で、紀子の尻を太股から摩り上げた。

紀子の体がビクンと反応した。うつ伏せになっているので権藤が何をしているのか分からなかったが、ひんやりとした感触を感じていた。

権藤は一瞬、染み一つない豊な尻の盛り上がりをドスで切り裂きたい衝動を覚えたが、何とか押し殺した。手足を縛り付けている紐を、それで断ち切った。ドスを部屋の隅に投げつけ、まるで子供を扱うように軽々と紀子の脇を持って抱えあげた。そのまま紀子の口を強く吸い上げた。口の中の唾液がすべて吸い尽くされるようだった。権藤の口が紀子の口を離れ、豊かな乳房を舌で愛撫した。そのまま紀子の太股を両肩に掲げ上げた。権藤の頭は紀子の股間に挟まれる恰好となった。紀子の膣を舐め上げ、クリトリスを強く吸い上げた。紀子は必死に耐えていたが、漣のように打ち寄せる快感に耐え切れず、権藤の頭を両足で強く締め付け絶頂に達した。ぐったりとした紀子を床に仰向けに寝かせ、その上に覆い被さっていった。紀子は権藤の巨根を思い出していた。膣を破壊される恐怖に、全身の肌が粟立った。権藤は、膣の入り口付近から奥へ貫こうとはしなかった。その欲求を必死に耐えているようだった。紀子を裏返しにし、尻を両手で開き、巨根をアヌスに突きつけた

がこちらも貫こうとはしなかった。

「お前は大切な商品だからな。今日のところは我慢してやるよ」

権藤の声は意外なほど優しかった。権藤は紀子の尻の膨らみを軽く噛み、ゆっくりとした動作で立ち上がった。

「村瀬、女を好きにしていいぞ」

権藤が部屋を出ていった後、下半身裸になった村瀬が紀子をうつ伏せにし、尻から犯し始めた。真珠を仕込んだ男根が紀子の膣に出入りしていた。重たげな乳房を揉まれ、アヌスには根元まで指を入れられていた。ヤクザに犯される恐怖と屈辱感に紀子の白い裸身が身悶えしていた。紀子にはこれからさらに辛い運命が待っていた。

別荘には、一坪ほどのユニットバスがついていた。中には二人の女が入っており、一人がもう一人の体を丹念に洗っていた。紀子と和美である。和美も紀子同様浚われてきたのだが、男達の食事と下の世話そして女の世話一切をやらされていた。

時には男達の命令で、女とレズの役をやらされることもあった。　和美はここに連れられてこられたてから、もう半年近くたっていた。

和美は、石鹸で紀子の前半身を洗い終えると、背中を流し始めた。二人とも無言だった。紀子は、されるがまま、和美に身をまかせていた。突然、紀子は和美の石鹸を持つ手をつかんだ。

「お願い。私を逃がしてくれない」

和美は疲れ果てていた。

「何言ってんのよ。私だってあんたと同じようなものよ」

それ以上会話は続かなかった。和美は紀子の運命が解っていた。男達の商売に使われて最後は弄ばれながら殺されるのだ。ここに連れられてきた女は皆殺される運命にあった。

和美自身が紀子を殺すことになるかも知れないのだ。和美にとって紀子は物と同じであり情をかける必要はまったく感じなかった。

少しの沈黙の後、紀子は和美のほうを向いて、

「同じ境遇なら私の気持ちも解るはずよ」

「私は疲れているんだよ。毎日毎日、あんたの尻の穴まで洗わされているんだ」

和美は紀子に対し、苛立ちを覚えていた。自分がこんな目に遭うのは、女のせいだと考えていた。女のために自分もいずれ死ぬことになるのだ。

突然、和美は右手で紀子の髪をつかみ、浴槽のお湯の中へ上半身を押しつけた。紀子は息ができず、もがき苦しんだ。和美は紀子の尻の穴に左手の一差し指と中指の二本を一気に入れかき回した。和美は紀子の体から力が抜けるのを感じた。　余りの苦痛に失神したらしい。和美は慌てて紀子を抱き起こし風呂の床に寝かせた。紀子は大事な商品だった。紀子を殺せば、自分も死ぬことになるのだ。和美は見様見真似で覚えた人工呼吸を施した。紀子の鼻をつまみ、口をあけ息を吹き込んだ。紀子はすぐに息を吹き返した。ぜいぜいとした咳をし、水を吐いた。

「殺さないで下さい」

紀子は、和美の前に膝を付き懇願した。

「いいよ、殺すのは止めた。その代わり私に奉仕

するのよ。そこに仰向けで寝てちょうだい」
紀子は素直に従った。和美は紀子の顔の上に跨った。
「私の尻の穴を舐めるのよ」
バスタブから押し殺したような喘ぎ声が漏れてきた。

中央区のとあるホテルの特別室では権藤組が、主催するパーティの準備が進行中だった。札幌市内の有力者はもとより、全国的に知名度の高い政治家や芸能人も参加していた。パーティの呼び物は美女を好きなように料理するものだった。
参加者にはＳＭやらスカトロジーや考えられる得る限りの異常な性的嗜好を持っていた。
バスルームでは紀子が和美に身体の隅々まで洗われていた。紀子はホテルまでは権藤組が所有するベンツに乗せられてきた。パーティの会場には地下の駐車場から荷物用エレベータを使って連れてこられた。
パーティの参加資格は、年会費一億円を支払った

ものに与えられた。年会費の他に競りにかけられた女を抱く際にも応分の金を払わせられた。パーティには、紀子のように別荘と呼ばれる隠れ家に捕らわれている女と組員の自宅等に軟禁された女が使用された。権藤組の所有するスナック等の店舗で働く従業員が十名ほどコンパニオンとして働いていた。

パーティの参加者はコンパニオンについては好きなだけ抱くことができた。囚われの身の女達は競り落とさなければ抱くことは出来なかった。参加者は皆札束入りのスーツケースを持参していた。参加者は一様に青色のバスローブを身にまとっていた。パーティの時間となった。今日のパーティに参加した会員は十名であり、有力な政治家や財界の大物と呼ばれる著名人も参加していた。

会員は部屋の隅に中央を向いて置かれたソファに座っていた。ソファは二人がけでそれぞれビキニパンティをはいただけのコンパニオンが付き添っていた。ソファはそれぞれ色が違っていた。

「皆様、本日は新人をご紹介することとなりまし

た。紹介します紀子といいます。存分にお楽しみ下さい」

パーティの進行役は権藤組の若頭村瀬昭雄であった。紀子が、純白のテーブルクロスが敷かれたキャスター付きテーブルの上にうつ伏せの状態で運ばれてきた。申し訳程度タオルが腰の上に置かれていた。紀子の美しさのために会場から深い溜息が漏れた。スポットライトが、紀子の裸身を、会場の中央部に浮き上がらせた。

「皆様身体検査の時間です。ご自由に紀子の身体をご確認下さい。ただし爪を立てる等の身体を傷つける行為はお止め下さい。別途料金を頂くことなります」

会員全員が、紀子が載せられたテーブルに集まった。会員の一人が、紀子の腰の上に載せられたタオルをはぎ取ったのが合図だった。乳房を揉むもの、膣に指を入れるもの、尻を両手で押し開きアヌスを検査するもの等何本もの手と指が紀子の体中を這い回っていた。アヌスに指の付け根まで入れてくるものや膣に舌を入れるもののもいた。紀子

は為されるがままだ。紀子に人格というものは、認められなかった。会員達にとっては、嬲り放題の奴隷に過ぎなかった。

「皆様そろそろ身体検査の時間を終了させていただきます。競売の時間です。お席にお戻り下さい」

会員達は、部屋の隅に置かれた二人がけのソファに戻った。コンパニオンが用意していたスーツケースに現金を入れた。コンパニオンはそれを進行役の村瀬まで持っていった。村瀬は中身をチェックした。

「本日、紀子を一番に抱ける幸運な方が決定しました。青い席にお座りの方どうぞ中央までご足労願います」

呼ばれたのはでっぷりと太った初老の男だった。興奮のあまり頬が赤らんでいた。紀子はテーブルの上で胸を両手で隠した格好で座っていた。恥毛が見えていた。このパーティでは参加者の面前で行為をする決まりだった。競りに敗れても女を抱く以外に目で犯す楽しみがあった。

男はバスタオルを脱いで全裸となった。紀子の

右腕をとりテーブルからおろし、紀子を立ったまま前屈みの姿勢にさせ、盛り上がった尻の合間に顔を埋めた。それから延々と紀子のアヌスと膣を交互に舐め続けた。最初、紀子は周知の中で犯されることに抵抗を感じていたが、その男の微妙な舌使いに次第に我を忘れていった。長い愛撫の後に紀子を仰向けにし、足を大きく開かせて挿入していった。紀子の喘ぎ声がパーティ会場に漏れた。

それを合図に、各ソファに座り紀子が犯されるのを食入るように見つめていた会員達とコンパニオンとの間で性交が始まった。女の股間に顔を埋めるもの、尻から犯すものと様々だった。

二番目の男は最初から紀子の背後に回り、油を塗ったアヌスに挿入した。苦痛の叫びが部屋中に広がった。男はそれにはかまわず、腰を激しく紀子の尻に叩き付けた。紀子の苦痛の叫びが次第に喘ぎ声に変わっていった。その男が果て、その後次々に男が入れ替わった。

七人目で紀子は意識を失っていた。男達は意識を

失い人形のようになった紀子の身体を弄んだ。失神した紀子に浣腸する者まで現れた。パーティは男達の気の済むまで延々と続けられた。

第四章　イリーナ　**へと続く**